

YUKIYAMA

冬の大万木山

頂にあるもの

1218m



雪庇——それは、雪と風が作り出す自然の造形美。山の尾根などにできる雪の塊で、風が一方から吹き付けることで現れます。雪庇を見られるのは、大万木山の山頂から縦走路を琴引山方面に約500メートル進んだ辺り。今月は、雪庇に魅せられ、雪山に登り続ける登山愛好家を取り上げます。



信藤 一郎さん(町区)

大万木山や琴引山などに登る登山愛好家(年間約12回)。冬には「大万木山スノーシュートレッキング」の案内人を務めるなど、「雪山の魅力」を多くの人に伝えている

雪庇に魅せられた登山愛好家

登山愛好家の信藤さんが、雪庇に出会ったのは17年前。冬の大万木山に初めて登ったときのことでした。「知人に勧められて、雪庇見たさに1人で登ったよ。何人かで登る予定だったけど、みんな都合が悪くなつて。登山道の入り口から続いていた足跡を頼りに登ってみたんだよ」と信藤さん。雪庇を目にした瞬間、「まさに、雪の芸術だ」と感動したそうです。

それから毎年、冬の大万木山に登るように。73歳になった今でも、年に4回程、雪山に登っています。「なんでたんびに雪山に登るん」。よく地元の人から聞かれる質問です。「雪山に度上がれば病みつきになる」と信藤さん。その理由は、雪庇だけではありませんでした。

息をのむ絶景

積雪のおかげで、普段歩けないところを歩けるのも理由の一つ。信藤さんは「安全で絶景が見られる尾根」を選んで登っていきます。標高800メートル付近で姿を現すのが、ブナの原生林。春から夏にかけては緑色、秋には紅色や黄金色、冬には白色の姿で出迎えてくれます。

「枝に雪がまとわり付いて、白い花が咲いているように見えるのは、標高1,000メートルを超えた辺りから。ここを境に景色が変わるんだよ」と信藤さん。山頂に近づくと、雪の量が増え、気温が下がり、風も強くなります。でも、山頂で見られるブナ林は格別。「白いブナと青い空のコントラストがたまらね」と話します。

多いときで2メートル以上積もった雪、葉のない広葉樹。視界をさえぎるものがない山頂付近から辺りを見下ろすと、息をのむ絶景が広がっています。「全てが見渡せる。山を一人じめできる感覚」と信藤さん。そばには、人の気配を感じて姿を隠した、ウサギの足跡が残っていました。

弾む四方山話

「こんにちは」。少し離れたところから、他の登山者の声が聞こえます。

「こんにちは。どこから来ちゃったんですか」。信藤さんがいつも聞く質問です。でも、ほとんどが町外の人。広島や山口、福岡、大阪から来る人もいるそうです。来られた理由を尋ねると、「島根と広島の間境をまたいで2県を見渡せるのが素敵です」と。続けて「登山道が何本もあるから、どの道を通るか選べるし、リタイアしようと思ったらリタイアできるのも安心ですよ」という言葉が返ってきます。

山頂を目指した者同士で話が弾み、「来年雪山に登るときは連絡してもらえませんか」と声を掛けられることも。信藤さんは決まっています。「一緒に登りましょう」と答えます。

こんなやり取りから、誰かと一緒に雪山に登ることが増えてきた信藤さん。「1人で登るより安心だし、万が一のことがあったらいけんけん」と、雪山に登るときに気を付けていることを教えてくれました。

この上ない達成感

「雪山は危険」ってイメージがあるけど、大万木山は割りと安全で、とつきやすい雪山だよ。木に囲まれとるし、大きな雪崩も起きにくいしね」と信藤さん。「でも、谷には降りないようにしとる。登れんようになるけん」と続けます。

薄いつ防着を何枚も重ね着するのが雪山登山スタイル。汗は雪山登山の天敵で、汗が冷えると、体力を消耗してしまうからです。「いくら準備をしても、自然はいつも想像を超えてくる」と信藤さん。山頂まで長靴で登れることもあれば、かんじきやスノーシューを履いても、雪に埋まって登れないこともあるそうです。山頂にたどり着いても、吹雪で何も見えないこともしばしば。「今日、登れるとこまで登ろう」が信藤さんのモットーです。

「今日はどこまで登れるんかな。どんな景色が見られるんかな」と、一歩ずつ進むのだそう。「雪山にしかない達成感が頂にあるんだよ」と話す信藤さんの笑い声が、冬の大万木山の山頂に響いていました。

一緒に登ろう 大万木山スノーシュートレッキング

●日/2月19日(土)・26日(土)

※悪天候の場合は翌日が予備日

●料金/3,000円(中学生以上)

※昼食は各自持参。スノーシュー(トレッキングポール含む)を借りる場合は、別途1,000円(本イベント以外でも借りられます)

■問合せ/(一社)飯南町観光協会
76-9050



①「今日は青空が広がるとかもよ」と、自宅前から山頂の状況を予想 ②標高1,000メートル付近では、多くの人足を止めて写真を撮り始める ③雪の芸術はここにも。写真のタイトルは「雪のオブジェ」と命名(平成26年に信藤さんが撮影) ④滑って山を下りられるのも醍醐味(大万木山スノーシュートレッキング)